

関係発達臨床の立場から

——ある高機能自閉症の子をもつ母親の手記より

小林隆児

東海大学健康科学部社会福祉学科

勝又基与美

拡木の母

はじめに

愛着形成の重要性が虐待臨床のみならず、自閉症臨床においても次第に取り上げられることが多くなってきた。その背景のひとつには、高機能広汎性発達障害(HFPPD)あるいは高機能自閉症問題を契機に、自閉症の中核的問題は対人相互性の障碍、つまりは社会性の問題にあるとの認識が広がってきたことが挙げられる。

数年前にある学術専門誌で特集「私の治療法—広汎性発達障害」の連載があった。そこでは一〇名の執筆者が自分の考える広汎性発達障害(PDD)の治療について述べているが、その中の三名が愛着形成の重要性を取り

上げて⁽³⁾⁽¹⁰⁾いる。しかし、残念なことに、愛着形成の重要性は論じられてはいても、それが自閉症臨床の諸問題とどのように関連しているのかについては、あまり論じられてはいないように思えた。

これまで筆者(小林)は関係発達臨床の立場から、とりわけ乳幼児早期の愛着形成の重要性を述べるとともに、愛着をめぐる問題がその後の子どもたちの発達過程で起こる臨床上の諸問題と深く関連していることを論じてきた。自閉症にみられる独特な言語発達病理とされてきたものや、多様な行動障碍が愛着形成の問題と、その結果生まれる関係障碍を基盤にした対人交流の蓄積の中で生み出さ

れていることをみてきた。

本稿で取り上げる事例は、幼児期にMIU(Mother-Infant Unit)で関係発達支援を行った高機能自閉症の一例である。本事例を取り上げたいと思ったのは、本事例の母親自身がMIUでの体験とそこでの母親としてのさまざまな思いを手記によって率直に語ってくれているからである。

PDDにみられる愛着をめぐる問題は、子どもは養育者に対する関係欲求(愛着欲求)を潜在的にはもっているにもかかわらず、生来的と考えられる知覚過敏が対人接近によって生まれる強い緊張や不安をもたらし、いざかかわり合おうとすると、回避的反応が引き起こされ、愛着関係が成立しがたいことにある。このような過敏な子どもとかわり合いをもつことによつて、養育者もそのむずかしい関係(関係障碍)の渦の中に巻き込まれてしまう。そこでの互いの生きづらさや大変さは当事者にしかわからないことがきわめて多い。その意味でも今回紹介する母親の手記は、(高機能)自閉症の子どもの子育ての大変さとともに、関係の悪循環(関係障碍)から抜け出し、母子間で愛着関係が次第に深まっていく過程が臨場感を伴ってわれわれに迫ってくる。

幸いご家族の好意により、親子ともここで

は実名にて紹介することになった。

事例の紹介

〔事例〕 拓太^{たくた}…男児。初診時四歳〇ヵ月
(現在小学四年生)。

〔知的発達水準〕 正常。

〔臨床診断〕 自閉症。

〔主訴〕 ことばの遅れ、視線回避、会話が一方通行、オウム返し、独語、偏った好み。

〔家族構成〕 父方祖父母、両親、三歳上の姉、父方叔父二人の八人家族。自営業のため当時は母も事務仕事と店の販売の手伝いに従事していた。

〔発達歴〕 胎生期、特に問題はなかった。乳幼児期、喘息がひどく、生後一年は寝てばかりであった。そのころから視線回避、無表情、もの静かな子であった。人見知りがあったために、手のかからない子だと思っていた。生後一〇ヵ月か一一ヵ月のときにハイハイをせずにいきなり歩けるようになった。一歳半健診では保健婦からは特に異常は指摘されなかった。二歳健診の時、初めてことばの遅れを指摘された。ことばはなかなか出でこず、二歳半になってようやく発語。三歳健診時、保健婦から母子通級の活動を勧められて数回参加した。しかし、拓太は泣いてまっ

く参加しなかった。

その後、スプーンやフォークをお守り代わりのように四六時中握って放そうとしない時期があったが、いつの間にかそれほど執着しなくなった。三歳半の時に、某病院小児精神科を受診。脳波と聴力の検査を受けたが異常なし。発達検査で二歳程度と言われた。

幼児期から初診時まで、自分の世界に没頭することが多く、天井を見て笑い出したり、手をヒラヒラさせたり、ブツブツと一人でつぶやくことがしばしば見受けられる。こちらの言っていることは伝わっているが、自分が伝えたいことはうまく表現できず、彼流の独特なことばを使うことが多い。聞かれたことに対してオウム返しで答えることも多い。当時は保育園に通っていた。

親子の關係のむすかし

MIUでの初回のセッションで実施された新奇場面法 (Strange Situation Procedure: SSP) (図1) で認められた特徴は以下の通りであった (なお、○付き数字は図1の各図版の番号を示す)。

② 拓太は入室するなり机の上に置かれた細々とした遊具を手で扱い、物色している。母も一緒になって拓太の興味を引くものがな

いか探している。へこうちゃん、消防自動車あるよ！へこうちゃん、トーマス(機関車)あるよ！と次々に拓太に見せる。それに付き合うようにして拓太は母が差し出した玩具を手にとって扱うが、興味が引かれないのか少しだけ扱ってはすぐに他の物に気が移ってしまう。母はなんとか拓太の関心を引きつけようと懸命になって拓太の名前を呼びながら、玩具を次々に手にとって見せる。拓太が野菜や果物を手にとって包丁で切り始めると、拓太の動きに合わせてへよいしょ！などと懸命に声をかけている。母の懸命さがとても伝わってくる。しかし、どこか拓太の気持ちは乗らず、引いてしまっているようにみえる。

③ ストレンジャー (ST) が入室すると、すぐに母が気づいて挨拶をする。拓太は先ほども野菜や果物を手にとって包丁で切っている。母は拓太にへこうちゃん、こんにちはは？と挨拶をするように促す。すると拓太は包丁を扱いながらへコンニチハと小声で気のない返事。母は拓太の顔をSTのほうに向けさせようとする。しばらくして、拓太が包丁で野菜を切っていると、それに合わせてへよいしょとかけ声をかける。そしてすぐに、切った野菜をへ今度は切ったのを(先生に)、はい、どうぞとSTに差し上げるよ

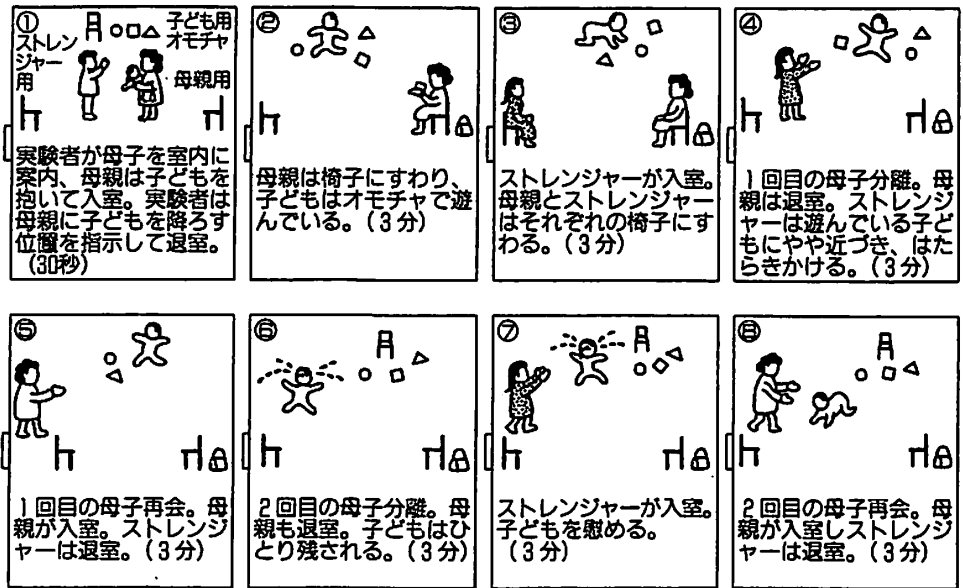


図1 新奇場面法

柏木恵子・古澤頼雄・宮下孝広『発達心理学への招待』62頁、ミネルヴァ書房、1986年

うにと拡太に促す。拡太はなんら抵抗なく手にとつてSTのほうに近づいて手渡す。母子ふたりでままごと遊びをしているように見えるが、母の活発な働きかけが前景に出て、拡太の動きはどことなく控えめで楽しそうな感じは受けない。母の誘いや促しに素直

に従っているようにみえるが、拡太はどことなく動かされて印象が強い。母の拡太への言葉かけがとも多いのに比して、拡太の発語はほとんどみられない。

④母はスタッフの誘導にすぐに反応してへはい、すみません」と言いながら退室。拡太も特に目立った反応をすることなく、同じように野菜切りを黙々と続けていたが、三〇秒ほど経過すると突然、野菜を持っていた前腕に力が入って間代性の痙攣類似の動き（不規則な不随意運動と思われる）が数回出現する。さらにまもなく唐突に意味不明な独り言をつぶやき始める（この発声も声のチックと同様の不随意運動と思われる）。STはずつと黙って椅子に座って眺めている。二人のあいだになんとも言えない緊張した雰囲気を感じ取れる。

⑤母は黙って入室。拡太は母に気づいてドアのほうに視線を向けるが、すぐに再び野菜のほうに視線を移す。拡太がしばらく何もしないで立っていると、母はおもちゃを扱いたがら積極的に拡太を遊びに促し始める。相変わらず、拡太の発語はまったく聞かれない。

⑥スタッフに促されて母は黙って退室。拡太は母の出て行く後ろ姿を目で追っているが、後追いすることはない。呆然と見送っている。一〇秒ほどすると突然先ほどと同様の独り言をつぶやき始めるが、先ほどよりもかなり大きな声で緊張の高いのが印象的である。机から離れて積み上げられたブロックの上に登り、ブロックを手で思い切り叩いては独り言を発してブロックから下りる。するとつぎに大きなボールに近づくと、少し触れるだけで今度は机のほうに再び戻る。先ほどやっていた野菜切りである。このように何をやっていても集中することはできず、落ち着かない様子である。母が退室して三分近く経過した頃に突然、ドアのほうに接近しながら独り言をつぶやく。しかし、ドアを開けるようとはしない。まもなくSTが入室。

⑦STは椅子に座って静かに拡太を見守っている。拡太はSTに特に関心を示すことなく、先ほどと同様にひとり黙々と野菜切り。しかし、一分半ほど経過すると、突然独り言をつぶやき始める。拡太は天井のほうに前腕を差し上げながら何か語りかけるように大声を発しているが、まったく意味不明。STはそれにどのように応答してよいか困惑気味で、じっとしているだけである。

⑧母との再会。母の入室にすぐに気づいて

ドアのほうを見るが、すぐに先ほど扱っていた玩具のほうに視線を移す。玩具を扱っている拡太に近づいた母は、「へこうちゃん、何していた?」と尋ねながら拡太と一緒に何かをしようと言いかける。拡太は先ほどから机の玩具ばかりに注意が向いていたが、まもなく母は部屋にあった滑り台を指さして「へこうちゃん、すべり台があるよ」と拡太に誘い始める。すると驚いたことに、拡太は玩具を両手に持ったまま、勢いよく(というよりも唐突に)滑り台のほうに走っていき、滑り台の階段を登っていく。母は両手に持っていた玩具を見て、「へあぶないよ、ひとつちようだい」と促すと、すぐに母にひとつ手渡してから滑る。一回滑っただけで、ふたたび先ほどの玩具を扱い始める。まるで、他の遊びをしてもここに戻ることによって拡太は多少なりとも安心しているようにみえる。机に置かれた玩具を見ていて、拡太が知っていると思われるものだと母はそれを取り出して「これなに?」と幾度も尋ねている。拡太が反応しないと執拗に何度も尋ねている。拡太は「ナニ」とオウム返して反応しているばかりである。ただ、拡太が自分で玩具を扱いながら突然「ヘキタ!」と大声で叫ぶ。しかし、母はさきほどと同様に「これなに?」と繰り返し尋ねている。母は拡太に働きかけることに懸

まとめ

SSP開始前の説明時、母は自分が不在になっても拡太は何の反応もしないだろうと予測していたが、実はそうではなく、拡太は後追いをしたり、泣いたりしないだけであった。母の不在に対して情動面の激しい混乱を示し、ついには不随意運動と思われるような奇妙な反応(チック様発声、前腕の痙攣様運動)を見せている。さらにはひとりつぶやくようにして空を見つめている。近くで見ると非常に痛々しい感じのする反応である。拡太への母の熱心な働きかけには回避的な態度を示しながらも、いざ母が不在になると、明らかに不安が高まっている。しかし、母を求めようとする直接的行動を取ることにはできない。非常に強い動因的葛藤が認められ、ついには葛藤行動としての不随意運動を思わせる反応が生じている。

この時認められた拡太の反応は、筆者の予想を超えたとても深刻なものであった。そして、HFPDDにおいて青年期成人期に顕在化してくる自我障碍がすぐに思い浮かんできた。そのため筆者は、この時両親にか

なり真剣な思いで事態の重大さを説明したように思う。

拡太にみられるもつとも深刻な問題は、動因的葛藤によって自分を他者に向かつて主張することがきわめて困難であると同時に、周囲の働きかけに容易に引き込まれて動かされてしまうということにあった。筆者はこのことが将来拡太の自我発達にとって負の影響をもたらすことを強く危惧したのである。そこでわれわれはこの母子に対して、当面は拡太が自分の気持ちを表に出しやすくすることを目指して、ふたりの関係を支えていくことにした。その際、われわれは拡太の抱えている問題を両親に理解してもらおうとともに、拡太の気持ち(情動)に焦点を当てたかかわりが保障されることを常に心がけた。

母親の手記より

MIUでの最初の頃の大変さ

拡太四歳の冬、「自閉症です」と先生に宣告されてからの私は必死だった。初めは皆に追いつくにはどうしたらよいのだろうとしか考えなかつたように思う。「毎週金曜日に来られますか?」と言われ、拡太に対して何かの治療があるのか? 何とかしたいという思いで「はい」と返事をしたことを覚えている。

MIUで拓太と私とで「自由に遊んでください」と言われるが、拓太と一つのことでは遊ぶとか一緒に〇〇するということができなかったため、(何かをしようとする気がない拓太と) どうしていいかわからず、おもちゃ箱からおもちゃを取り出しては「これはどう?」「じゃあ、これは?」「滑り台やってみよう!」と私から誘うことがほとんどだった。一緒に遊んでいても次から次へと遊びが変わり、何をしたいのかわからず、ギクシャクしていた。

普通この頃(四歳)の子どもたちは、上の子(姉の美帆)がそうだったように、大人を巻き込んで遊びたがるのに拓太は一人で遊ぶことのほうが多く、私が話しかけたり誘ったりすると、たちまちスツとどこかに行ってしまう。たとえば、絵本を見て私が「これはライオンだね。キリンさんが……」と言い出すと、拓太はどんどん次のページをめくり、はいおしまい!と言わんばかりに本を閉じピョンピョン跳ねながら行ってしまった。私が歌を歌っていると「あー!」と大声で歌わないで!という感じで怒って私の口を塞いだりする。だからますますどう接していいかわからず、一人で遊ぶ拓太をただ傍で見ているしかなかった。

MIUでよく指摘されたのは、私の余計な

言葉かけの多さと先回りする行動だった。たとえば、クルクルスロープで遊び出した拓太は次から次へと赤い車、青い車と上から落とし、見入っている。そばで見ている私は「あー赤だね、次は青だね」と無意識に口から出していた(静かだから何かしゃべらなきゃ!という思いと、色を覚えてくれたら……:という思いから話しかけていた)。すると拓太はふっとその場からいなくなる。その時は何がいけなかったかわからず、悲しくなつて寂しさからまた次の遊びを誘ってみる。するとまた二人はかみ合わなかった。そんな時小林先生は「お母さん!たとえば二重奏で高音と低音でうたを歌っているとします。きれいなハーモニーになるには、お互いの声をしっかりと確かめ、よく聞き、ほどよいところで声を出すとすばらしく響き合いますね」と言ってくれた。

初めの頃、先生が言ってくださることが理解できず、拓太を何とかしてくれる「治療」と思っていたが、ほとんど私の拓太への接し方(言い方)への注意だった。この時期、正直言って辛かった。何をどうしたらいいかわからなかったから……。

帰りの車の中、主人と話しながら隣で眠る拓太の寝顔を見て泣いて帰ったことを思い出す。自営業での仕事と長男の嫁の立場上(家

事と育児と仕事)、結婚してから本当に忙しい生活だった。毎日時間に追われていた日々だった。よく先生と板垣さん(当時担当していた共同援助者)に、夫婦の話や家庭の話しを聞いてもらい愚痴を言って、ストレスを発散させてもらったことを覚えている。

この頃の拓太に何かをさせようとすると、たちまち拒否反応を見せる拓太にどう接したらいいのかかわからず、よく私と衝突した。塗り絵をさせようとクレヨンを一色(黒だけ)しか使わない拓太に他の色も勧めたり、私が持つて塗ろうとすると、私を大きな声で怒り「アー!」と言いながらクレヨンを投げつけてきた。キャッチボールしようと外に誘って私がボールを投げて、両手をぶらんと下げて手を出そうとしない。私はそんな拓太を見てがっかりした。私は何かしなくちゃと思つて誘つてみても、拓太は心ここにあらずで無表情だった。この頃の拓太は自発的に何かをするということがなかった。

朝起きて一度だけ拓太に(寝室の)カーテンを開けさせたことがあり、何日か経つて何気なく私がカーテンを開けると真つ赤な顔で怒り、げんこつで思いっきり叩いてきた。普通では怒らないことで怒り出すことが多かった。こちらのストレスも大変なものだった。辛かった。機嫌が悪くて怒り出すとその

後もずっと機嫌が悪くて、長いときは一日たつぷりかかってしまうこともあった。

それでも、時々見せる拓太の笑顔見たさに毎日過ごしていたように思う。

外で転んで擦りむいた傷を自分の手で押さえ、じつと堪えて我慢していた拓太。一緒に寝ていても向き合って寝てくれず、必ず私に背中を向けて左足だけ私の足に絡み付けて寝ていた。私のほうから寄り添っていないと不安になって、いつも拓太を私からギュー、ほっぺにチューして「拓太、大好きだよ」と言っていないと心細かった。拓太から甘えて来てほしかった。

忘れられないエピソードー拓太とホウチヨウ

M I U に通い始めて二カ月が経った冬、毎週金曜日はM I U の日、土日は保育園がお休み、月曜日になると園に行くことを嫌がることが多くなった。制服を見せただけで大泣きをして「ホウチヨウ(包丁)！ ホウチヨウ！」と言うようになった。

その頃M I U で、拓太は色々な形の野菜のおもちやをスパン！ スパン！ と次々に(おもちやの)包丁で切る遊びを気に入ってやっていたことを思い出した。拓太の場合、包丁そのものではなく、その時私と過ごしたM I U での時間、空間全体のことを

意味しているんだなあと感じ取れた。「こうちゃん、今日は病院行かないよ」と話すと、「ホウチヨウ！」「保育園行こうか」「ホウチヨウ！」と大泣きをして抵抗することもあって、そんな時は園を休ませた。家で私が夕食の支度で里芋を洗っていると、隣に来てジッと見ている。次の芋をまな板の上の一つポンと置いてくれた。「ありがとう。お手伝いしてくれるのー！」に真顔でまた次の里芋の出番を待つて次から次へ……。その頃から私が夕食の支度をしていると、だし汁を入れたり、皮をむいたりしてお手伝いをしてくれた。

ある日食事の支度をしていると、前に拓太にやらせたことをつい忘れてしまい、私がパツパツとやっているところを見た拓太は「アー！ ヤダー！」って叫びながら怒り出すこともあった。やらせてくれなかったーという感じで。

何でもそうだけれど、こちらに時間と余裕がある時は拓太にゆっくり付き合うことができるけれど、生活していく中でできないこともあり、私が焦ると決まって拓太は苛立ち、怒り出す。響き合ってしまう。そんな話を先生に伝えると、「好きな人がいると、その人の真似をしたくなるものです」と言ってくれた。小さい頃から私を頼ってくれず、お出か

けをしても手を振り払い突っ走り、いつも私が見逃さないようハラハラしながら拓太を目で追いかけていたことを思い出すと、先生の「好きな人」という言葉にジーンときて嬉しくなった。

月曜日になると、朝食後の私の「さあ、行こうか！」に「イヤ！ イヤ、ホウチヨウ！」と言いながらズボンに片足を入れて支度をすると、いう行動をとっていた。自分で行きたくない……。でもお母さんは行こうって言っているし……。自分はどうしたいのに……。でも相手の気持ち、私の「行ってほしい」をわかりすぎて混乱する。イヤは言えたのだけれど体は着替えている。そして右手を強く握りしめて自分のあごをガンガン叩き出す。こういう拓太の健気な思いをその頃わかってあげられず、結局私の言うことを聞いた、ということがまだまだあったように思う。

風邪をひいて三九度の熱、扁桃腺は真っ赤。だるそうで体はぐったり。熱が出ている時でも座りながら「ホウチヨウくホウチヨウく」と何度も言っていた。体調が悪いと「ママ！ ママ！」は多くていつもより甘えてくるし、この時の「ホウチヨウく」が心細そうに頼ってくるような言い方なのに気がついた。

「ホウチヨウ」という言葉に色々な意味が

あり、その時の表情、口調で拓太が何を私に言いたいのかわかるようになってきた。当時の拓太はこちらの言っていることは理解できているようだったが、オウム返しが多く、言葉でのコミュニケーションはほとんどできなかった。

ある日、お天気がいい日、公園まで出かけて行って、一日たつぷり私と一緒に遊んで、家の車庫に車を入れていると、チャイルドシートに座っている拓太がニコニコ顔で「ホウチョウ〜」と言ってきた。その言い方が「あく楽しかった」と私には聞こえなかったから「そうね〜本当楽しかったね。また行こうね」と自然に返すとともに嬉しそうにピョンピョン跳ねながらお家に入ってしまった。拓太の「楽しかった〜」という思いが私に伝わり、(ママ、わかってくれた)通じた、と喜んで体いっぱい表現してくれた。

この頃から嫌なことはイヤ! とはつきり言えるようになってきて、少しずつ自分の感情、気持ちを言葉で表現してくれるようになってきた。

外遊びで大好きなのがブランコで、真冬のとて寒い日に突然外ほうきで勝手口を掃き出したから、「上手ね。ありがと」と言うと、私の顔をチラチラ見ながら嬉しそうに飽きずにやっていた。あんまり寒いから「もう中に

入ろうよ」と言うと、「イヤ、イヤ」「じゃ、どこに行くの?」「プーラン」と私の目を見てニコツとしながら答えた。プーランとは近くの神社のブランコのこと。ちょうどお姉ちゃんや学校から帰ってくる時間だったから途中で一緒になり、その後三人でお散歩になった。「もう帰ろうよ」「マダ! マダ!」って顔も口をとんがらせてどんだん前を歩いて行った。自己主張ができるようになってきた。また、中央公園へ美帆と私、拓太の三人で出かけて行って、ジャングルジムの上のほうまで皆で登り、私が降りようとする、「ママ、ママ! オイデ」登ってきて! と催促をし、私の顔を見て「楽シイ!」って笑って言ったりして可愛らしさが増す頃だった。

こんなエピソードを金曜日先生に話すと、「拓太さんの心が満たされているからでしょうね」と言ってくれた。拓太をはじめ自閉症の子どもたちが、聴覚・視覚の過敏さのため、不安な時に耳をふさいだり、顔は真顔で落ち着かず、不安が強いとパニックになる心理を具体的にこんなふう話してくれた。「たとえ山で遭難したとする。たった一人残されたら、その時に吹いた風の音や何かの物音にビクツとして体は震え、心細い気持ちになりませんか?」と、私にとつとでもわかりやすい表現だったのと、なんだか切

なくなつて、今までわからなくてごめんねって本当に思った。そうだ、これからはこの心細さを私が埋めてあげたい。ママがいてホツとするものに変えてあげたいって強く思つて家に帰ったことを覚えている。

三月の中頃、朝起きて私の顔を見るなり、「ホウチョウ!」「昨日行つたね。遊んで楽しかったね」と言うと、「雄基、富士行ク!」と言ってきたので私はびっくりした。雄基とは私の姉の子(長男)の名前で、実家の富士へ行きたいと言っているようだ。次の日の日曜日、パパがゴルフの練習場(打ちっぱなし)へ行くので、皆で行くことになった。

車に乗つてのお出かけはとても嬉しいようで、いつもニコニコしている。パパが何度か打っていると美帆と拓太がやりたがって、私が「順番ね」と言うと、拓太は「仲良ク!」なんて言ってきた。保育園で先生と子どもたちの会話をよく聞いているんだなあって思った。二人に十分やらせてあげたので満足したのか、「帰るよ!」の声にぐずらず帰りの支度ができた。

家に帰つて風呂に入ろうと着替えをしていると、私の目を見て「ゴルフ行キタイ!」と言うので、「楽しかったね」。また連れて行ってもらおうね」と私。その時の顔がニコニコ嬉しそうに「楽しかったよ」と言っている

ようだった。

その後、春休みに入って園をお休みしているせいか、朝起きてすぐ「ホウチョウ！ ホウチョウ行キタイ」という言葉を言わなくなった。その代わり、「ゴルフ！」とか、「トイザラス！」とか、一度行って楽しかったところを言うようになった。普段は目が合わないことが多いが、こういう時の顔はニコッと笑っていて私の目をしっかり見てくれる。そこで「行かないよ」とか言ってしまうと、怒ってずっと「ゴルフ！ ゴルフ！ トイザラス！」と言っているの、「そうね、ゴルフ楽しかったね。また行こうね」と言うと言と落ち着いてニコニコしている。

四月の中頃、事務処理が溜まっていて、春休みが終わった頃からずっと仕事の毎日だったから、拓太と注意深く触れ合う時間もなかった。すると拓太は途端に私の目を見なくなったり、呼んでも振り向かなくなったりした。何かに追われるような生活をしていると、気持ちに余裕がなくなり、ストレスも溜まる。そういうことに敏感な拓太は私に近づかない。

子どもと向き合う―母親の決断

その頃の拓太は少しずつ自己主張するようになってきているのに、MIUで私がよく「仕事

が忙しくて……」とか、「事務処理が大変で……」と漏らすと、先生は真剣な顔で「お母さん、仕事、仕事って言っている場合じゃありませんよ。親と子の壁を取り去るには今やらなければ。年月が経つにつれてどんどんその壁が厚くなりますよ。片手間では拓太君の相手はできないですよ……」「仕事は誰でもできるけど、拓太君のお母さんはお母さんしかないんですよ……」と。先生の言葉にハッとさせられ、またとてもショックだった。今では先生がおっしゃる壁がどんなことを指しているのかわかるけれど、その頃の私は、ただただ、このままではいけない！ ということに気づかされた。拓太と一緒に遊んでいても、頭の中は次の自分のすること（たとえば仕事だったり、食事の支度のことだったり）を考えていて、ちゃんと遊んであげられなかったなあと考えさせられる言葉だった。

この日から、そうだ、ちゃんと拓太と向き合おう。主人と真剣に話し合った。私にとつて最初の決断だった。家族には先生に言われたこと、今の自分の気持ちを思い切って伝え、仕事から一線を引いて拓太を見つめ、一緒にいよう！ と決めた。次の日から保育園も休園させて……。

先生は「先を見ると今が見えなくなるんだ

よ」と常に言っていた。たしかに周りの子どもたちと比べたり、何年後はどうなっているんだろう？ と心配したりすればキリがなく、また心は不安になる。「親が不安になれば、子ども不安になるんだよ。親と子は互いに鏡だからね」と。そうした不安な時の私の心は拓太を見ていない。家では言われたことを思い出し、「見守る」ことを心がけた。言葉かけに気をつけた。ひとことで見守ると言ってもむずかしく、何かをしようとする気のない子に、話し言葉が少ししか出ない子にどうしてもこちらが何かを働きかけてしまい、動かしてしまい、子どもは思わずそれにのまわって動いてしまう。それが拓太の本意ではなかったことが多かったのだろう。そのため自分の世界に入ってしまう、ブツブツと独り言を言って落ち着かず、行ったり来たり、ピョンピョン跳ねたり……と体もギシギシしてしまおうんだろうと思う。イヤが言えず、自分を出せなかった時、精一杯自分の体で「わかって！ 気づいて！」って伝えていたんだと思う。

MIUに通い始め、こういう拓太と私のズレに、私自身が気づかされ、わかりづらい拓太を何とかして理解したい、心と心で通じ合いたいという思いになっていた頃だから、先生の言ってくださった言葉の重さに気づけた

ように思う。

「ホウチヨウ」という言葉から色々なことを教わった。大人の私たちにとって「ホウチヨウ」とはそのままだ言葉通りに思いがちだが、拓太にとつての「ホウチヨウ」は色々な意味をもつこと、気持ちがかもつていこと。それに気づけたのは、拓太の「今ここで」どんな思いで行動しているかを、私が感じ取って拓太と一緒に過ごした体験からだと思ふ。

親というのは欲張りなもので、一つできるとやっと思えるようになったことも忘れて次の言葉を期待してしまう。拓太が三歳くらいの頃、はつきりした言葉も出なく、せめて私に向かつて「ママ！」って言うてほしいと、当時、友人に話していたことを思い出す。言葉が出る上で、こういう（ママがわかつてくれた、わかり合えたという）体験がいかに大切かということを実感し始めた頃だった。

三歩進んでは二歩下がる

仕事から離れ、一日のんびり拓太と一緒にいると時間の長さに驚いた。一日ってこんなに長いんだと気づく。こちらに余裕も出てくるから、拓太は自分を出せるようになり、私に甘えてくる。

拓太に「しまじろうのリズム体操」をしよ

うと私が歌いながら誘うと、手を繋いで高くピョンと体を使って遊んだり、「お馬やるよー」の私の声に反応して、すぐ私の背中に乗ってきて「乗った？」と聞くと、「乗ったヨー！」と元気な声。とても嬉しくてこたつの周りを何周も回って遊ぶ。お店と居間が扉一枚で続いていたので、前だったら私が気を遣い（皆の目や仕事があるのに……という思い）思いつきり相手ができなかったけど、家族に話してあるから安心して拓太と遊べて、私も嬉しかった。きっと私の顔もニコニコ顔だったと思ふ。

工場の機械の音が大きくて、耳を塞ぎ、私の体に自分の体をくっつけてきて、私の手で耳を塞がせる。自分が怖い、心細い時など、だんだん私に頼ってきてくれるようになるから私も本当に嬉しかった。

夜寝る前はベッドで、「ママ！ ピョンピョン」って言いながら拓太が誘ってきて、私が「ピョン、ピョン、ピョン、ピョン、ピョン、くるりと回ってピョン！ ピョン！ ピョン！」と歌いながら跳ねていると、美帆も入ってきて、最後は三人でコチョコチョコくすぐりあって大笑い。何回も「ヤッテ！」って催促してきて大騒ぎ。そのくせ私からビーチボールを投げて遊ぼうって誘っても真顔で乗ってこなかったり、突然前からすごい勢いで抱きついてきて頬をすりすりして自分からチューしてきたりする。

甘えた声を出す時は、体をすりすりして抱っこをせがむ。ちょっと前までは抱っこしようとする、すぐ背中に回っておんぶになっていたから、拓太を抱っこする時（できた時）は私もゆったりした気持ちで、優しい空気で包み込むようにして、拓太が納得するまで抱っこしてやっていた。

私に甘えたり、ますます自己主張ができるようになってくると、自分の思いどおりのことができなかったり、私がわからなかったりすると、すごい勢いで怒り出すようになった。トーマスのお気に入りの本を何度も何度も「ママ、読んで！」と言ってくる。読む順や歌い方が違うと、とても怒ってやり直させられたり、二階に上がる階段を歩く時も私と手を繋いで一緒に上がらないと初めからやり直したり。まず初めにやったこと（あの時、あの場所、あの風景など）その時の私の声の調子など、とても正確に覚えていて、その感覚が少しでも違おうと怒り出す。

初めの体験を忠実に守ろうとする。そうしなきゃダメらしい。なぜ？ なんとも不思議な感覚だなとその頃は思ったけど、今考えると、そうしなきゃ安心できなかったんだね。拓太が拓太でいるためには必要な行動だった

んだね。

自分でやる、やる！ というところも出てきて、お風呂のフタを自分が開けないと大騒ぎ。一緒に入浴しようとする服を慌てて脱いで、私を押しつけてフタを開けに行ったり、買い物から帰って来て家の鍵を開け、一番に家に入らないと大泣きしてパニックになったりする。

日曜日、家族で出かける時は、行く場所を考えてしまう。デパートやショッピングはパパも私も美帆も大好きだから出かけて行くが、人ごみの多さ、大きなホール、イベントなどの大きな音（声）に怖がる拓太に付き合っている、ゆつくり買い物をするのができない。立体駐車場は特に怖がるので車を止めることができず、わざわざ青空駐車場を探したりした。

外に出たがり、お家に帰りたがる拓太をなだめ、好きなジュースを与えながら何とか時間を作っても、「ギヤーギヤー、ワーワー」やられると、我慢している私たちはたまらない気持ちになる。美帆もたまらず、「拓太！もう一緒に連れて行かない！」と言う。とても酷く手におえなくなつた時は、私も耐え切れず、「そうだね、そうしよう！」といやくな気持ちになつて家に帰る、なんてことはしよっちゅうだった。

こんなこともあった。箱根までドライブに行つて「星の王子様ミュージアム」に四人で行くと、美帆はワクワク嬉しそう。対照的だったのが真顔の拓太。入り口から入ることができず、私の抱っこで目をつぶり、耳を塞いでやつと中へ。結局落ち着いて皆で見れず、パパが拓太と先に外へ出て、私と美帆で拓太のことを気にしながら慌ててサツと見て出てくる。美帆は「もつとゆつくり見たかった。また行こうね」と言う。二人の気持ちが変わるだけに複雑で、とても切なくなつた。その後、芦ノ湖に着いて、湖の辺りをお散歩しようとしても、車から降りようとしないう拓太。綺麗な遊覧船を見つけると、美帆は早くお散歩したくて強い口調で来るように言つても「イヤ！ イヤ！」「船イヤ！」と降りず。歩かせようにも大泣きで、湖の傍まで行くこともできなかつた。その時の天気は曇り空で、

どんより灰色。不安になる時、天気も大いに影響するらしい。特に今にも降り出しそうな曇り空は今でも苦手。嫌がる拓太の気持ちをわかりながらも、私もこういう拓太を受け入れられる時とできない時があり、ため息ついで悲しくなる。

その日の夜、寝る前の歯ブラシもいつもならやらせてくれるのに、とても嫌がり、抵抗してずっと大きな声を出して暴れる。せつか

くの日曜日、お出かけしても充実してなくて、夜もひどいから、私もどうしたらいいか、悲しいやら情けないやらで、私は拓太を思いっきりギューッと抱きしめた、というように縛りつけた”という表現が正しかったと思う。拓太は余計大泣きして「ママ、イヤ！ママ、イヤ！」と言いなながらパパのほうに行つてしまった。空しい気持ち、悲しい気持ち、いけないことをしてしまったこと反省とで、その夜はなかなか眠れなかつた。

普通の家族が普通にできること（当たり前にできること）がわが家にとってはとてもむずかしく、お出かけしている時は、主人、私、美帆、皆どこかで緊張している。いつ騒ぎ出すか、パニックになるか。そんな気持ちでいるから、出かけていても心から皆で楽しんでいなかつたように思う。

ある日、寝起きで機嫌が悪く（朝起きた時、私が横にいないと大泣きして暴れる）、その声に気がついた私が、慌てて拓太の傍に行つて体を抱こうとすると、力強く足で私のお腹を蹴ってきた。どうして？ 何もしていないのに蹴るの？ なぜ？ 普通ならこんなことで怒らないのにどうして？ 我慢できず、拓太に向けて怒りも込み上げてきた。いつも気にして我慢していることもあり、ストレスが溜まる。私が感情むき出しで泣きなが

「何で蹴るの!」と怒鳴ると、怒った私の顔をのぞいて、「ゴメンナサイ。ゴメンナサイ」謝っている拓太を長い間許すことができないうた。何事も吸収してとか、拓太は拓太なんだからと思わなきゃ思わなきゃとしているから、この頃私に反動がきて爆発することがよくあった。

普通の子と比べてはいけないうと頭でわかっていても、なぜ!? と思う自分がいて、いつも私も安心感を求めていた。辛かった。平常心でいたいと思えば思うほどできなかった。園を休ませ一緒にいる分、拓太に手がかかり、すぐに機嫌が悪くなり、何でもないとこゝろで怒ったり、叩いたり、拓太の気持ちが落ち着くまでかなりかかって私もだいたいぶ落ち込んだ。そんな話をMIUで話すと、「それだけ緊張しているんだね。親が変われば子は必ず変わるから大丈夫!」と言ってくださった。この言葉は今でも拓太と向き合った時、悩んだ時、私を励ましてくれる。

週二回美帆のバレーがあるため、拓太を連れて送り迎え。車に乗ってのお出かけは好きだったし、美帆のレッススが終わるまで近くの公園で私と遊んで待っていた。雪が降る寒い季節にもたくさん着込んで遊びに行った。とにかくどこへ行くにも一緒だった。「ママ! コッチ、コッチ」と私を誘う。私が追

いかけると、嬉しそうに笑いながら走って逃げる。こういう笑顔は私の不安な気持ちをパッと洗い流してくれる。パパやお姉ちゃんに怒られて泣いている時、私の姿が見えると「ママー!」と泣きながら抱きついてきて「そう怒られちゃったの。悲しいね」とわかってあげると、ホッとした顔つきになり、泣き止む姿を見て自信がついたり。喜んだり落ち込んだりの繰り返し……の日々を過ごしていると、だんだん前ほど困ったと感じることが少なくなつて、私の言っていることが前より理解できるようになった。こちらがゆつくり落ち着いて話すと、少しずつ、少しずつ待つ。ことができるようにもなつてきた。私が話すことを理解していないと感じても、とりあえず全部話して拓太の目線で伝えていった。

がっかりしたり、落ち込んだりすることはまだまだあるけど、何より、以前よりたくさん私を頼って求めてくるから、これが励みになつて自信につながつたんだと思う。三歩進んでは二歩下がり、山あり谷あり。この頃の拓太の行動に私は一喜一憂していた。

この頃の私にとってどうしても忘れられないエピソードがある。MIUに通い始めて一年数ヵ月経った二月のある寒い日のことだった。午後からパラパラと雪が降ってきた。そ

んなとつても寒い日は、拓太とお家でゴロゴロ過ごす。居間の大きな扉の窓に頭をくっつけて仰向けになつた私は、自分のほうへ向かつてくる雪を下から見ながら拓太に「こゝやつて見ると面白いよ!」と教えた。「すごいねー、沢山落ちてくるねー」って。拓太も「ワァ〜!」という感じで二人でしばらく見入っていた。

次の日も窓を開けると雪が降っていた。今度は拓太から仰向けに寝て、昨日と同じ見方で雪を見ていた。しばらくして私を引っ張り、同じことしるって(一緒に見ようよ)という感じで誘ってくれた。こういう時のゆつくり流れる時間を過ごしていると、その時の雰囲気、空気がホンワカとしていて、お互い穏やかな気持ちになり、言葉なんていらない。一つのことを見て、一緒に感じていられることが嬉しかった。

その後、一年間保育園に通つた後に、拓太は近くの小学校に入学した。

母親の手記を読んで

PPDDにみられる関係のむすかしさ

PPDDの子どもとかかわり合うことのむすかしさがこの手記を読むととてもよくわかる。通常の子どもであれば、多くの欲求を直

接的に表現することが多いために、われわれがそれに応じることは基本的にさほどむずかしいことではない。しかし、PDDの子どもたちを見てみると、したいことが本当にあるのかさえ疑いたくなるほどに、自分を表に出そうとしない。ややもすると、それは彼らの自己表現の能力の問題であるかのように語られやすいが、実際にはそうではないことがこの手記を通して明らかにされている。

PDDの子どもを抱えた母親は不安と焦燥感に駆られながら、なんとかして子どもに好ましい働きかけを、いつも考えながら接しているものだが、彼らが反応しているのは実は養育者の働きかける内容そのものではなく、その時の母親自身の気持ちのありようであることがわかる。拓太の敏感さからくる育てにくさを前にして焦燥感のつる養育者の思いが、二人の関係の悪循環にさらなる拍車をかけている。

このようにPDDの子どもと関係をもつことのむずかしさの基盤には、情動面で互いに(負の)影響を及ぼし合っていることが大きく関係していることに母親もしばらくして気づいている。

関係が変わる契機

こうした気づきの体験を通して、次第に母

親は自分から拓太に働きかけるというよりも、拓太の出すサインを極力見逃さないように心がけるようになっていく。そのような心構えによって、拓太が頻回に発した「ホウチヨウ」ということばに多様な意味が込められていることを実感として体験できたという印象的なエピソードが語られている。

この体験は母親にとってその後の子育てをする際のひとつの大きな自信となっていることがうかがわれる。話しことばに囚われることなく、子どもの気持ちの動きに自分のこころを響かせることがふたりのわかり合う原点であることに気づいたのである。コミュニケーションの基盤は言葉そのものではないということの発見でもある。

〈子が母に甘えること〉と〈母が子に甘えられること〉

愛着行動とは子どもが養育者に接近して安心感を求める行動を指すが、日本語でいう甘えは、もつと情緒的な意味合いを含み、かつ含蓄のあることばである。

拓太が心細くなった時に、母親に甘えることと次第にこころの安定(安心感)が生まれていくことが手に取るようにわかるが、それとともに、母親自身も拓太が自分に頼って甘えてくることによって、次第に母親としての

揺るぎない自信のようなものが育まれていく様子が伝わってくるのは実に感動的である。母親はただ一方的に子どもに安心感を与えるという関係ではなく、母親自身も子どもによって安心感を与えてもらっているという関係がそこには生まれているということである。

子どもの主体性と母親の主体性

このような母親の姿勢は子どもを甘やかすことにつながるものだという批判(というよりも非難)めいた言葉はいつも聞こえてくるものだ。今日の自閉症治療(療育)の大半は某のプログラムというようにして、子どもにことばをはじめとするさまざまなスキルやルールを教えることに力点が置かれている。つまりは、子どもたちにわれわれが何かをさせるといふ基本的な構えである。まるでPDDの子どもたちには彼らの思いなどないかのような捉え方である。

この手記を読んで痛感するのは、母親にはそのような姿勢がまったくみられず、常に拓太の気持ちを大切に、拓太が自己主張をしつかりとできるようになることに最もこころを砕いていることがひしひしと伝わってくる。拓太の気持ちに可能な限りつき合っている。拓太の気持ちを他の家族とともに共有していくという基本的姿勢である。そのこと

が結果的に、社会の中での拓太のさまざまな学びへと着実につながっていくことになる。

さらに大切なことは、子どもの主体性を大切にするという営みは、母親自身の子どもへの姿勢のあり方をも厳しく問うことになり、母親は子どもとしっかりと向き合うことを決意するまでに至っている。それが契機となつて、母親は拓太とのあいだで、たとえつらいことがあつてもそれから逃げることなく、真正面から向き合う姿勢を保つことができるようになった。『三歩進んで二歩下がる』ように、日々の生活は楽しいことばかりではないのだが、この親子のあいだには、そうしたつらいことも乗り越えることを可能にするほどまでに、互いがわかり合えたという大きな喜びを体感した積み重ねがあるのだろう。おそらくは、それが拓太にも母親にも生きる上での大きな力となりつつあることが、この手記からひしひしと伝わってくるのである。

おわりに

PDDの子どもを理解することはむずかしい。関係をもつこともむずかしい。いわんや気持ちを通じ合うことなど、とてもできるようなことではない。PDDの子どもとはそんなふうに思われている。PDDの子どもはコミュニケーション能力に障害があるからだ

も考えられている。本当にそうだろうかとも思う。彼らと関係をもつことはさほど容易なことではないことは認めるとしても、関係がどのようにして生まれ、育つのか、その発達過程の歩みを丁寧に読みとっていくことによつて、一見すると不可解なPDDの子どもの姿が、一般の子どもの育ちと基本的には同じものなのだということに気づく。

今回紹介した勝又さんの手記は、そのことを飾りのない率直なことばでもつてわれわれにわかりやすく示してくれている。

最後になるが、勝又さんのご家族に対して、本稿でこのような貴重な体験を実名のもとに公開していただいたことにごころよりお礼を申し上げたいと思う。この手記がPDDの子育てに悪戦苦闘されているご家族に少しでも勇気を与えることになればとごころより願っている。

(文献)

- (1) 小林隆児「自閉症と行動障害—関係障害臨床からの接近」岩崎学術出版社、二〇〇一年
- (2) 小林隆児「広汎性発達障害にみられる「自明性の喪失」に関する発達論的検討」『精神神経学雑誌』一〇二巻八号、一〇四五—一〇六二頁、二〇〇三年
- (3) 小林隆児「自閉症に対する関係発達支援の基

本『精神科治療学』一八巻七号、八四七—八五一頁、二〇〇三年

(4) 小林隆児「自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界」ミネルヴァ書房、二〇〇四年

(5) 小林隆児「関係発達支援の基本について」(小林隆児、鯨岡峻編)『自閉症の関係発達臨床』六五一—六九頁、日本評論社、二〇〇五年

(6) 小林隆児「主体性をはぐくむことの困難さと大切さ—幼児期と青年期をつなぐもの」『そだちの科学』五号、三五—四二頁、二〇〇五年

(7) 小林隆児「青年期アスペルガー症候群への心理的援助」『教育と医学』五四巻五号、四四六—四五五頁、二〇〇六年

(8) 精神科治療学連載「私の治療法—広汎性発達障害(1)〜(10)」『精神科治療学』一七巻二一—二一八巻八号、二〇〇二—二〇〇三年

(9) 白瀧貞昭「広汎性発達障害—私の治療法」『精神科治療学』一七巻二一—二一八巻八号、二〇〇二—二〇〇三年

(10) 杉山登志郎「治療法—広汎性発達障害」『精神科治療学』一八巻一—一八巻一八号、八五—九〇頁、二〇〇三年

(二)ばやし・りゅうじ／児童精神医学)

(かつまた・きよみ)